



夢追人VI

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第10号(R4. 6. 3)

河東中授業小景

体育祭が終わり、気持ちを切り替えて日々の授業に集中している河東中생たち。日常の授業の様子取材してみました。



7年生国語の授業。物語の構成を意識して読解する方法を図式化して考えました。



8年生理科の授業。モンスターボールを使って化学反応について考えていました。



9年生数学の授業。因数分解についてグループで解法を話し合っていました。



7年生音楽の授業。ビバルディの「春」を楽曲と映像と楽譜で分析していました。



8年生社会の授業。中四国地方について二階堂先生の圧倒的な説明力。



9年生理科の授業。合力について矢印を使って図で表現していました。

第1回学園運営協議会が開催されました

かとう学園は、本年度から小中一貫コミュニティ・スクールになりました。小中一貫教育は、10年以上前から取り組んでいます。さらにコミュニティ・スクールとして、より保護者や地域との連携を深めようとする試みです。時代が求めているように、今の子どもたちを効果的に育てるためには、学校だけでなく家庭や地域と力を結集する必要があります。「たくさんの大人の手で子どもたちをより良くより効果的に育てる」しくみが、コミュニティ・スクールです。

コミュニティ・スクール推進の中心となるのが、「学園運営協議会」です。学校・家庭・地域の代表者が定期的に集まり、かとう学園の教育について話し合います。本年度の第一回協議会が6月1日(水)河東小学校音楽室で開催されました。

河東中からは、PTA会長・吉原尚志様、保護者代表青木隆一様、河東コミュニティ、池野コミュニティ、中学校代表教師が参加しました。また会長には安部常美城西ヶ丘区長が選出されました。

今回は、「かとう学園の子どもたちの現状」についてグループに分かれて熟議をしました。かとうの子どもの実情はどうか、親の立場や地域の目、教師の考えが白熱した論議を生みました。



現在、河東中生は定期考査に向けて勉強を頑張っています。大切なのは、「本気」で取り組むことではないでしょうか。体育祭期間中、リーダーの口からたくさん出ていた言葉「本気で」。「本気」と題された二人の詩を紹介します。

本気 坂村真民

本気になると
世界が変わってくる
自分が変わってくる
変わってこなかったら
まだ本気になっていない証拠だ
本気な勉強 本気な仕事
ああ 人間一度 こいつを つかまんことには

本気 相田みつを

なんでもいいからさ
本気でやっごらん
本気でやれば
つかれないから
つかれても
つかれが
さわやかだから

どうにも答えが出ない、どうにも解決できない ～ネガティブ・ケイパビリティの魅力～

去年の大阪大学の二次試験の国語の問題はおもしろく、なるほどなあと思わずうなっていました。問題文自体に考えさせられました。どんな内容であったかあらましをのせますが、中学生には難しいかもしれません。しかし、この考え方を知っておくと、将来きっと役に立つと思いますので、がんばって読んでください。興味を持ったなら、ぜひ本物を読んでみてください。ネットで、「大阪大学入試問題 令和3年」と検索すれば、誰でも入手できます。

入試問題のテーマは、「ネガティブ・ケイパビリティ (negative capability)」。

ネガティブは、否定的とか消極的という意味でみんなも良く使う用語だと思います。ポジティブと反対の語です。ケイパビリティは、能力や才能という意味。

ネガティブ・ケイパビリティとは、「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのないことに耐える能力」を言います。あるいは、「すぐに証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さの中にあることができる能力」。直訳すると、「消極的能力」です。

中学生のみなさんも、どうしていいかわからないことが日常生活であると思います。自分はこのつもりで言ったのではないのに、友達から誤解されたなど。また、授業でやっていることがいまいち理解できないなど。

人間の脳は、「わかって」と常にかんがります。2+3=5のように答えが出ると脳もスッキリしてストレスがありません。しかし、目の前に、わけのわからないもの、不可思議なもの、いやなものが放置されていると、脳は落ち着かず、ストレスを感じます。それで、人の脳はストレスをさけるために、とりあえず意味づけをし、何とか「わかって」とします。世の中でノウハウもの、ハウツーものが歓迎されるのは、そのためです。「わかる」ための一番のものがマニュアル化です。マニュアルがあればわかりやすいし対応しやすくなるからです。人の脳が悩まなくてもすむようにマニュアルがあるととも言えます。

しかし、現代社会は、そう簡単に答えが出ないことの方が多くあります。将来は、その傾向がもっと進むでしょう。コロナへの対応やウクライナ情勢などどう対応すればいいか大人たちもみな苦悩しあがいています。簡単に答えが出ません。大切なことは、あきらめずに考え続け、対応し続けることではないでしょうか。つまり、ネガティブ・ケイパビリティというのは、こうした問題のように、どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのないことに耐え抜いて粘り強く取り組み続ける能力をさします。

中学生のみなさんも、身の回りにも、勉強の内容でも簡単に解決できない問題に満ちあふれているのではないのでしょうか。そんな時、すぐに解決できなくても、そうした問題を自分のものと引き受け、対応し続ける力をつけてほしいと思います。

普通、能力と言えば、何かをなしとげる能力を意味します。しかし、ここでは何かを処理して問題解決をする能力ではなく、そういうことをしない能力をむしろすすめています。

大阪大学の問題文の最後は次の文章でしめくられています。

「私たちは能力と言えば、才能や物事の処理能力を想像します。学校教育や職業教育が不断に追求し、目的としているのもこの能力です。問題が生じれば、的確かつ素早く対処する能力が要求されます。ネガティブ・ケイパビリティは、その裏返し能力です。どのようにも決められない、宙ぶらりんの状態をさげずに、耐え抜く能力です。」 河東中の教育は、こうした能力も地道に育てていきたいと考えています。